

〈魅惑のメンデルスゾーン〉

Magical Mendelssohn

指揮とお話 三ツ橋 敬子 Keiko Mitsuhashi, *conduct & talk*

ヴァイオリン 辻 彩奈* Ayana Tsuji, *violin**

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, *concertmaster*

メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64* (約26分)
Felix Mendelssohn: Violin Concerto in E minor, op.64* (ca. 26 min)

- I. アレグロ・モルト・アバッシオナート Allegro molto appassionato
- II. アンダンテ Andante
- III. アレグレット・ノン・トロッポ — アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

— 休憩 Intermission (約15分) —

メンデルスゾーン: 交響曲第4番 イ長調 作品90『イタリア』(約27分)
Felix Mendelssohn: Symphony No. 4 in A major "Italian" op.90 (ca. 27 min)

- I. アレグロ・ヴィヴァーチェ Allegro vivace
- II. アンダンテ・コン・モート Andante con moto
- III. コン・モート・モデラート Con moto moderato
- IV. サルタレッコ:プレスト Saltarello: Presto

第6回

平日の
午後の
コンサート

7/20(木) 14:00 開演 東京オペラシティ コンサートホール

Thu. July 20, 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト:ハラダ チェ



7/20

出演者プロフィール

指揮とお話 三ツ橋敬子

Keiko Mitsuhashi, conductor

東京都生まれ。東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とキジアーナ音楽院に留学。第10回アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールにて日本人として初めて優勝。第9回アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールにて女性初の受賞者として準優勝。併せて聴衆賞も獲得。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。これまでに国内の主要オーケストラへ客演するほか、ジュゼッパ・ヴェルディ響、スロヴァキア・フィル、などヨーロッパでの定期演奏会にも客演を重ねている。09年にはNewsweek Japan誌にて「世界が尊敬する日本人100人」に選出。2016年8月にはタン・ドゥン(指揮)と共にサントリーホール30周年記念 国際作曲委嘱作品再演シリーズにおいて「武満徹:ジェモー(双子座)」で東京フィルを指揮し成功に導いた。ヴェネツィア在住。



©大杉 隼平

ヴァイオリン 辻 彩奈

Ayana Tsuji, violin

1997年岐阜県大垣市生まれ。2016年、モントリオール国際音楽コンクール第1位、併せて5つの特別賞を受賞。これまでにモントリオール交響楽団、セジョン・ソロイスツ(韓国)、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団等と共演。2017年3月にはベリオのヴァイオリン協奏曲集(チェコ国立室内管弦楽団パルドビツェ)をNAXOSよりCDリリース。2015年度より公益財団法人ロームミュージックファンデーション奨学生。現在、東京音楽大学に特別特待奨学生として在学中。小林健次、矢口十詩子、中澤きみ子、小栗まち絵、原田幸一郎の各氏に師事。使用楽器は、NPO法人イエローエンジェルより貸与されている1748年製 Joannes Baptista Guadagnini。2017年、岐阜県芸術文化奨励を受賞。



©大杉 隼平

本公演のポイント

解説=柴田克彦

- 1 ドイツ初期ロマン派の代表格
メンデルスゾーンの看板協奏曲&交響曲
- 2 ロマンティックな表現や旋律美と
古典的な均整美を併せ持つ名作
- 3 ヴァイオリン協奏曲は、
全楽章ひと続きで演奏される点がポイント
- 4 交響曲第4番『イタリア』は、
特に第4楽章の民俗舞曲「サルタレッロ」に注目

PLUS
1

イタリアが目につく?

イタリア訪問の印象を描いたクラシック作品といえば、まずはチャイコフスキーの『イタリア奇想曲』、そして今回演奏されるメンデルスゾーンの『イタリア』交響曲の名が挙がります。

ほかにも、リストの『巡礼の年』第2年「イタリア」、R.シュトラウスの交響的幻想曲『イタリアより』、シャルパンティエの組曲『イタリアの印象』など少なからずありますが、北の国の作曲家が明るいイタリアの印象をストレートに表現した点で、チャイコフスキーとメンデルスゾーンの2作は双璧。「平日の午後のコンサート」では、5月にチャイコフスキーの同作が演奏されましたので、2曲を続けて耳にすることになります。

そもそもメンデルスゾーンは、国外に旅行することが多く、中でもイギリスには10回も訪れています。それに関連して生まれたのが、序曲『フィンガルの洞窟』と交響曲第3番『スコットランド』。中でも前者によって彼は“音の風景画家”と呼ばれることになりました。『イタリア』交響曲は、『フィンガルの洞窟』と同時期の作。“画家”の冴えた筆致に注目しましょう。



絵画にも才能のあった“音の風景画家”メンデルスゾーンの水彩画(1847年)

本日の作曲家

フェリックス・メンデルスゾーン

Felix Mendelssohn

(1809–1847)

ドイツ初期ロマン派を代表する、早熟の天才作曲家。裕福なユダヤ系ドイツ人銀行家の息子としてハンブルクに生まれ、3歳のとき一家でベルリンに移住。母から音楽の手ほどきを受け、9歳でピアノの公開演奏会を開くなど早くから才能を発揮します。自宅でプロを交えた音楽会が開かれ、自作もそこですぐに演奏される恵まれた環境で腕を磨き、16歳で弦楽八重奏曲、17歳で『真夏の夜の夢』序曲と、早くも現在のレギュラー演目を発表。1829年=20歳時には、当時忘れられていたJ.S.バッハの『マタイ受難曲』を復活演奏し、バッハの再評価に繋がる歴史的偉業を成し遂げました。以後指揮者としても活躍。1835年ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任し、楽団の水準向上に寄与しました。1843年にはライプツィヒ音楽院を創設し、1844年にはヴァイオリン協奏曲を完成。しかし1847年、慕っていた姉ファニーの死のショックと過労で体調が悪化し、脳卒中のため38歳の若さで亡くなりました。

彼は、短い生涯にもかかわらず、交響曲、協奏曲、室内楽曲、ピアノ曲(『無言歌集』は有名)、歌曲、宗教曲など様々なジャンルに多くの名作を残しました。その音楽は、古典的な様式にロマン主義的なテイストを融合させた作風で、抒情味と躍動感を併せ持ち、特に旋律の美しさが際立っています。また大作曲家には珍しい富裕層の出ということもあってか、幅広い教養を持ち、絵画にも才能を示しました。



1846年ごろのメンデルスゾーン



メンデルスゾーンの姉ファニー(1805-1847)。作曲家・ピアニスト・指揮者としても活躍していた

楽曲解説

メンデルスゾーン：
ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの諸作と並ぶ人気ヴァイオリン協奏曲。38歳で亡くなったメンデルスゾーンにとっては丹熟期、あるいは晩年ともいえる35歳の年に完成されました。

哀愁を帯びた有名な出だしから、終始流れるように運ばれるこの曲、実は完成までに6年を要した苦心作です。1838年メンデルスゾーンは、自身指揮者を務めるゲヴァントハウス管のコンサートマスターで友人のフェルディナンド・ダーヴィトのために作曲を始めました。しかしながら、あの冒頭部分に苦慮するなど、創作は難航。ダーヴィトの助言を仰ぎつつ、1844年9月ようやく完成し、翌年3月彼によって初演されました。

主な特徴は、全3楽章が切れ目なく演奏される点と、それまでは第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者任せだったカデンツァ(ソリストが一人で技巧を披露する部分)が、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にあります。これらは一貫した曲調を企図しての発想と思われますが、いずれも当時のヴァイオリン協奏曲としては画期的でした。

音楽自体は、古典的な均整美と甘美なロマンティシズムが溶け合った名曲。優美であると同時に男性的な力強さを秘めており、何より旋律の美しさは比類がありません。また独奏はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露します。

第1楽章：アレグロ・モルト・アパッシオナート。独奏が2小節目から登場するのも意外性充分。そこで弾かれる第1主題と、木管に出される第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で第2楽章へ移ります。

第2楽章：アンダンテ。抒情的な歌が流れゆくハ長調の緩徐楽章。中間部は短調に変わり、荘重な趣が漂います。

第3楽章：アレグレット・ノン・トロppo — アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。短い経過部から2つの主題を軸にしたホ長調の主部へ移り、ヴァイオリンの技巧を駆使した華麗な音楽が、テンポよく繰り広げられます。

メンデルスゾーン：

交響曲第4番 イ長調 作品90 『イタリア』

1830年、21歳のメンデルスゾーンはイタリアを訪問。ミラノ、フィレンツェ、ジェノヴァなどをまわり、同年11月から翌年4月までローマに滞在しました。当地の南国的な空気や謝肉祭などの風物に刺激を受けた彼は、滞在中に本作の作曲を始め、1833年ベルリンに戻って完成。ロンドン・フィルハーモニック協会から依頼されていた交響曲にこれを当て、同年5月ロンドンにて自身の指揮により初演しました。しかし出来映えに満足しなかった彼は、手元に置いたまま出版せず、改訂を重ねます。出版されたのは死後の1851年。それゆえ第2、3番よりも前の作ながら第4番となりました。

本作には、北ドイツのハンブルクに生まれ、やはり北部のベルリンで暮らすメンデルスゾーンが受けた陽光輝くイタリアのイメージが、簡潔・明快に反映されています。旋律美やリズム感も比類がなく、中でも当地の民俗舞曲サルタレッロ(15世紀頃に誕生した3拍子の快速舞曲で、交響曲での使用は類例がありません)を用いた終楽章には、誰しも心が躍ることでしょう。ただこの曲、面白いことに長調で始まり短調で終わるという交響曲としては珍しい構成になっています。そのことでただ明るいだけでなく深みが加わったともいえるでしょう。

第1楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ。弾けるように流れ出す冒頭の旋律=第1主題が、まさにイタリアを感じさせます。木管楽器で出される第2主題に、歯切れの良い主題も加わり、爽快な高揚感が生み出されます。

第2楽章：アンダンテ・コン・モート。ナポリで見た宗教行事の印象を反映したといわれる、短調のセンチメンタルな緩徐楽章。詩情豊かな旋律が息長く歌われていきます。

第3楽章：コン・モート・モデラート。憂いを帯びたメヌエット風の楽章。ここはドイツ的な荘厳さも漂います。

第4楽章：サルタレッロ、プレスト。3連音を重ねながら躍動感満点に畳み込む熱狂のフィナーレ。これが終始短調で書かれているのは意外です。

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。